研究課題	高齢者における独立歩行の獲得と維持のための新たなリハビリテーションプログラムの確立
支援番号	GC01920163
研究事業期間	平成 28 年 4 月 1 日から平成 31 年 3 月 31 日
助成金総額	1,400,000 円
研究代表者 （所属機関）	上原　彰史（新潟南病院　内科）
研究分担者 （所属機関）	小幡裕明（新潟南病院 内科、リハビリテーション部）・渡部裕（新潟南病院 内科）・和泉由貴（新潟南病院 リハビリテーション部）・鈴木順夫（新潟南病院 整形外科）・河内恭典（新潟南病院 栄養科）・山田笑・小浦方志織・新保浩史（新潟南病院 リハビリテーション部）・和泉徹（新潟南病院 内科、北里大学）
研究キーワード	独歩、歩行機能障害、運動器不安定症、高齢者
研究実績の概要	新潟県民の平均寿命と健康寿命の差は全国的に見て長く、日常生活に制限があり医療や介護の必要度が高いことから、この差の短縮は生活の質向上に加え医療介護負担の軽減にも直結する。なかでも歩行機能が障害された高齢者がそれを再獲得することによる健康寿命の延伸は、この障害がもたらす転倒・骨折による医療負担軽減につながる。その対策の一環とし当院では平成 25 年から高齢患者の独歩を守るための集学的な疾病管理プログラムである「独歩プロジェクト」を推進している。本研究は「高齢者における独立歩行の獲得と維持のための新たなリハビリテーションプログラムの確立」と題し、同プロジェクトの効果、身体機能評価と予後との関係性の検討を目的とした。 平成 28 年度は症例の集積と短期成績を研究の中心とした。Short physical performance battery (SPPB) score が 12 点未満の身体的フレイルを示し同プロジェクトに参加し退院出来た 65 歳以上の入院患者連続 137 名を対象とし以下の成績を得た。平均年齢 81.8 歳かつ SPPB 7.1 点の身体的フレイル高齢入院患者に対する DOPPO リハビリ介入により筋力・バランス・歩行が有意に改善した。その結果、83.9%と高率に元いた“住まい”に戻り在宅医療が可能となった。SPPB はリハビリ効果をガイドする臨床指標として有用であり 6 分間歩行距離と相関があった。平成 29 年度、30 年度は患者の長期成績を調査した。退院後 1 年以上経過した 195 人のうち 170 人（平均年齢 82.3 歳）を対象とした。1 年生存率は 88.2%。1 年予後に関与した身体機能評価指標は、退院時 SPPB、10m 努力歩行速度、6 分間歩行距離であった。 本研究より、SPPB はリハビリ効果をガイドするのみでなく年齢や死因に関わらず 1 年予後を予測する指標にもなる。9 点獲得すれば、短期成績として身体的フレイルを克服し、独立歩行を取り戻しセルフケアを可能にする。長期成績として予後改善の可能性から健康寿命延長につながる可能性がある。また 10m 努力歩行速度は、6 分間歩行距離、その 300m 達成を予測、また 1 年予後を予測する指標になる可能性があり、共に簡便で有用な身体機能検査法である。 この DOPPO リハビリ活動が少子・超高齢社会での有力な対応策となり、医療・介護負担を軽減し次世代・次々世代への付け回しを回避することを期待する。